

紫房 丹萼 旋ろ春を辞し、素蕊 悲しみ多くして聞くに忍びず。暮雨は便ち巫歌より散じ
余香は猶お魏台に上つて分る。魂は南浦に銷えて波空こく緑に望みは長門に絶えて日燠り
す。易し。翠被は已に空しく桃檝遠く、今より首を擡いて更に群を離れん。

回風舞、已に落ちて猶お成す半面の粧。滄海 各帰つて 珠 淚を迸しらせ。章台 人去、
骨 香を遺す。双蝶を伝うるに意なきを之んや、尽く委ぬ 芳心と蜜房と。

宋初の元の宋庠も同題の詩があり「宋詩紀事」は「竊至津艇」を引いていつ、
夏英公の安州に守たりしとき、景文兄弟、布衣を以て游学す。席上各、落花の詩を賦す。英

公、以て古輔の器ありとなす。のち元憲け状元、景文は甲科にて同榜。天下、以て二宋とな
す。

後村のいう李商隱の作は「李義山詩集」卷三に収める「和張秀才落花有感」

晴暖 余芳を感ぜしめ、紅苞 斜房に雜る。落つる時なお自ら舞い、掃きし後さらに香を聞

く。夢罷んで羅薦を收め、仙帰つて玉箱を劫む。迴腸の九廻せし後、猶お迴腸を刺すあり。

巧世についてけともかく、宋初の「落花」の詩に李商隱の「無題」詩などの影響は看取される
しかしそれ以上に李賀の「残菊曲」を意識にしているのではないだろうか。

柳菴相産不知數

この句の注釈としては韓愈の「晚春」と題する二つの詩を提示するのがよいだろう。

草樹門春の久しく帰らざるを知り、百般の紅紫、芳菲を闘わしむ、楊花と榆莢とは才思なく、

惟だ天に浸り雪と伴つて飛ぶ庭解す多敷み、（注）（注）

誰か春色を収めて將に帰らんを祈する、（注）（注）

随い、等閑に掠取て空園を成る、（注）（注）

そうして、前句を變調連についで、（注）（注）

已に身を將可憐憫善けり飛空を分たせ母を、（注）（注）

無きもまた春風に誤まれ、（注）（注）

この三首の訳注は拙著『韓愈詩大系』に収めるので、（注）（注）

次のようになろうか、（注）（注）

老けた夫の設けた壺中、（注）（注）

分を見出た、（注）（注）

總やかに安らかな終末をむかえ得たであろうに、（注）（注）

からの意志と力て、別の壺中の天を嘗もうとしたばかりに、（注）（注）

する狂おしい乱舞のうち、（注）（注）

愚かしいといえはまことに愚かしいが、（注）（注）

女二ころは、道学者のさかしらに離れて見れば、（注）（注）

そのような、（注）（注）

立ち去るが、榆の莢ばかりはものあわれもくもひく。行列を見てもなくそこに割り込もうと走り出す連中のように、天にはびこり橋立として、夢消え幻消えに空園を、せきたてながら救しれずけく。

沈郎青錢文城路

「夾」字を藁浮耀牝本は「莢」とするが誤りである。さて、「習書」食貨志にいう。

晋は、中原喪乱し元帝（大江を過ぎ、都を江南に移せし）より、（呉の）孫氏の旧錢を用う。輕重雜行す。大なるものはこれを比輪（錢）といい、中なるものはこれを四文錢（）という。

呉興の沈充また小錢を鑄る。これを沈郎錢という。錢すでに多からず。これによつてやや貴

小錢の乏しいときに出たので値うち以上に重宝されたが、城市の路をせばめるほどにうずだかくてはどうか。沈どのの青銅錢にそっくりの榆の莢諸君。

沈充の伝は「習書」卷九十八に見える。呉興の豪族でその地の太守。晋の車騎將軍となつたが、自分をひきたててくれた征南大將軍關羽同三司王敦の反乱に應じ、敗れて故郷に帰る途中、道に迷い、もとの部下にとらわれ殺された。

韓愈の「晚春」「落花」の三首を、元和七年か八年の作ではないかとわたしは推測するが確實なことはわからない。「残糸曲」も同じ時期のものと思うがこれまたきめつけるわけにゆかぬ。鶯が師の作に学んだのが愈が弟子の作に示唆をうけたのか、それももとより断定できぬが、両者の間には共通するものがある。だから製作時の前後にかかわらず互いに注釈として使用しうるのだ。

共通するといっても、もちろんふたりの愉快に對感感情も微妙な違いがあり、愈はそのアツケラカンとした、無才思、氣のきかなさは、あきれながら微笑を送っているようなところが、鶯のには醒めた視線が感ぜられる。

さて周誠真は、「残糸曲」を「言近旨遠」用語に卑近だが旨趣は幽遠な作品だとして、次のように解説する。

われわれは難なく見出た「落花」と「榆莢」は写景であり、同時にまた春に遊ぶ少女と少年とを分けて譬喩していることを、「鶯嘯兒」「黃蜂歸」と春に遊ぶ男女とが隱微に對比され、この対比は当然ほのかに諷意を含む。蜂や鳥は家に帰り、兒を育てることを代得ているのに、春園遊ぶ男女は宴楽を知るだけで春光の老いようとする知らぬ、これを見れば人の警覺力はまた小動物に及ばぬ。

この詩には二つの色調がある、緑と黄だ。少年の形象は緑に属し、少女のは黄に属する。少年は「綠鬢年少年」、少女は「金釵客」、垂楊は緑、「残糸」「鶯」と「黃蜂」は黄、「垂楊兼老」「殘糸欲斷」はほのかす、女性の社会的地位は男性のそれに從属し、男性の庇護を

夫と女の地位は動搖する。「鶯啼兒」「美娘」は「家庭を守り子供を養育する」のが女性の任務であることをいう。少女の特徴は「金釵」、これは裝飾が女性の社会的任務の一つであることをいう。

このあとに、サキに引いた一節があり、つづけていう。

「落花起作迴風舞」は漢の宮人麗娟の典故を使っている。麗娟が迴風舞をすると庭の花をまきこんで落とさせる。落花はずでに迴風舞をすることができ、たぶん別の花々をまきこみ落とさせるだろう。このことと榆莢の「相催」とはよく似てゐるのではないか。

しかし榆莢の「相催」は、「生あれば必ず死あり」の自然律に順応してゐるに過ぎぬ。落花の起舞こそ、吹き落とされるままになるまいと努めて生を求めているのだ。ただ、落花の起舞は風の力に因るにすぎず、たちまちのうちにまた地上におちる。これではじたばたする。はじとしてゐるのに及ばぬではないか。しかもその舞いがかえ、てさらに多くの落花をまわく。これでは巧を弄して反って拙なのではないか。

そんなら詩人の同情は運命に安んじる榆莢に傾き、運命に安んじない落花には傾かないのだらうか。われわれは落花にいくつかの特徴があるのに注意すべきだ。第一、詩人は落花がどんな色をしているのか明言も暗示もせぬ。それ自身の色調があるらしい。第二、「起作迴風舞」には落花の活力が畢竟ほかの多くと同じでないことを顯示する。第三、「落花」の上句は「花台欲暮春辞去」、落花の起舞は自分のためだけでなく、逝こうとする春光をひきとめようとするためなのだ。

詩人の落花に対する感情態度は諷刺的であると同時に諷美的、慨歎的だ。

榎莢は「不知数」で「夾城路」だが、詩人は落花の数量には言及せぬ。これは世人で榎莢のように運命に安んじるものも多く、落花のように運命に安んじない者は少いことを暗示している。

榎莢は白くて、地に墜ちたのち「沈郎青鏡」に変化する。これはわれわれに青白色の繒粉壺を連想させる。少年は「綠鬢」だが、綠鬢の間にすでに白髪のある（首句の「垂楊葉老」にすでにこの「二」がほのめいている）詩人の感覚中では老人と少年の間の時間のへだたりは存在しない。

榎莢が地に墜ちたのち「沈郎青鏡」に変化する。これは人口死後にやうと時間の影響から逃れうることを暗示する。人が死んだのち、この印象が永遠に青春であるのは、沈郎がわれわれにのこす印象が青春であるのとそっくりだ。しかし印象は印象にすぎず、榎莢の實際の運命は「夾城路」だ。

「不知数」「夾城路」は世人に対するいきどおりだが、自らにするいきどおりの成分をも含む。「落花」の句はさし示す。女性の社会的地位は男性に從属するが、社会と伝統も、完全には彼女の生命力と意志力とを判過しえないことを。

この解説の、ことに後段はすくれていると思う。ただ前段は原詩の幽微に比して割り切りすぎた感があり、△回家、嘯児▽と△遊春▽の対立を「二」に見るだけで、この詩が△諷意▽を含む作だとしても刺旨淺劣ではないか。これが「落花曲」ならばともかくも、「残糸曲」という題意

「二二までやってきて、さてわたし自身は「残糸曲」をなんと訳せばよいか。

「サキにもいったように、この残糸には、遊糸、蛛網、柳糸がほめいて、そのどれをも切りす
てるわけにはいかぬ。「柳糸説をとらぬ」といふ勇氣はない。しかしこの詩の主題は、ひと
の「こころも、おのれの「こころも」ありとみて手にはとられず、みれば又ひくゑもしらす」とわが
中世のひとがなげいたところと近いおもむきをうたうにあつたと察せられる。そこに「さいわい
誤りがなければ『源氏』にならうて「かげろふの曲」といふてもよい。しかし源詩はややく
だけた調子だし、直接は指せぬにしても、くものあみも柳の糸も匂わせたといふれば、やはり、
「糸遊の曲」「いとゆふのうた」あたりには落ちつこうか、いややはり源題の「残糸曲」はそのま
ま訳題の「こして」本文の中で「糸遊」を生かせばよい。それならばはじめに掲げた試訳はほと
んど動かす必要はないのだが、「花臺欲暮春辭去」の訳文を

花の台うたいのくれぐれに 春はまかりぬ

と訂正しておこう。その上で見直して拙訳が文字通りの拙劣なのに苦笑せざるをえない。

この詩は諷諭の作かどうか。

そう見る必要はないとおもう。しかし強いて見たいというなら、この作中の女を非難することでおのれを道徳的だと思いたいような人の心の傾きに対してはなたれる諷諭であろう。わたしのうける感じでは、諷諭しようというような気持もおこらぬ醒めた眼が、醒めたままで強いアルコールに幻暈しているみたいだ。

1976.3.11

付記 「晋書」王敦伝に、伝が酒をのんだあといつも魏の武帝の兼行「老驥伏櫪、志在千里。烈士暮年、壯心不已」と歌い、加意で唾壺を打ち節をとったので壺のふちは尽く欠けた、という。「世説新語」にもこの「語林」ではその壺が珊瑚だったというようである。李賀はもとよりその話は知っていたはずだが、「残糸曲」の壺にそのイメージを移してはいないだろう。 3.12

二〇世紀の李賀 (八)

陳培瑋

陳培瑋「李賀評伝」は一九二五年「國立廣東大學文科學院季刊」第一期に掲載された。わたしの知る範囲では二〇世紀にはいつてからの中国人の李賀に関する專論としては早い方に属し、近

草森伸一氏がそのコピーを贈りわたしに紹介するようにといわれたので(二)にとりあげる。
この評伝では引用の李商隠詩を、

「龍脊貼連錢、

銀蹄白踏煙。

無人織錦韉、

誰爲鑄金鞭？」

といった風に割りつけてあって、草森風にいえば、デザインとして新しい。前記周論文や熊裕芳「李長吉與月」(芋灯 一九二四年)がこの体裁をとっていないとすれば最初のものということになるかもしれない。

掲載誌の二〇二―二三一を占めその三〇ページを九つの章に分かつ。(一)は李商隠の「李商隠評伝」などに燃る雲の生涯と作品集の略介。

(二)は「馬詩」と「高軒過」を引いて幼年時の抱負の遠大と社会人としての坎坷不遇を記す。(三)坎坷による抑鬱不平の気は、酒にまぎらすほかは、忘れられた古人や荒廃した故宮に同情の涙をそそぎ、骨肉の兄弟にその言しみを訴えることにはかじえただけだ。「勉愛行」を引いて入すぐれた詩人でありながら、食に追われ、やむをえず主はえでかてを得、家を遠くはなれる。しかも幼い弟を手許においておくことさえできぬ。向たるあわれなことから「潞州張大宅病酒を引いて入あゝの冷酷な社会、乱離の世界にあって誰がおまゝの旅中のわびしい心を温めに来よう。

おまえはただ残蕙の淚眼と見つめあい、秋の虫の鳴咽と応答しあうだけ。おまえの愛する兄弟といえは「夢の中であつまつて笑」えろだけなのだ。感情移入してほとんど一體化するまでに感傷的で、曼殊大師の小説を読むようだ。

(四)「客遊」を引いて懐郷の情をのべ、昌谷詩篇によつて望の故郷は昌谷だとする。

(五)杜牧「長吉文集序」の「深嘆古今未嘗經道者」を分析し、賀が好んで詠する対象を、荒台英雄、美人……とし、「過華清宮」「還自會稽歌」を憑弔故宮、「梁台古愁」を憑弔荒台、「王潘臺下作」を憑弔英雄、「蘇小小墓」「追和回謝銅雀妓」を憑弔美人の作といひ、「銅駝悲」につけては、

これに必ずしも荒煙蔓草中の銅駝を憑弔するのではなく、滄桑の変を経た銅駝のために同情の淚をそそぐだけではない。「橋南多馬客」以下は、ただちに銅駝と化身して、痛哭流涕しつゝ普天下の醉生夢死者流を憑弔したのだ。

(六)芸術上の描写は客観的であるべきだが、詩人は科学者ではないから、情感が理知の作用を超過し、色眼鏡をかけた感はまめかれぬ。李賀は精神的傷害をうけ、その描写は病的主観的色彩が濃厚だ。「李憑箏篋引」「蜀国絃」の音調描写は凄酸。「神絃曲」の鬼氣描写は凄厲に過ぎ、「雁門太守行」の鼓声は凄楚にたえず、「南山田中行」は涙ぐっしよりの、淚的世界。「美人梳頭歌」にいたつて胸中の迷悶がほぐれた。もしもかれの精神が健全で、あまり悲観をかかえず、短命で死ぬに至らなかつたら、きっと天地間の自然の美をとりあげてことごとく欣賞し、ことごとく描写しただらう。

活の抑圧を一時的なからどりのそで、肉体精神を人間苦から解放し高揚させるのは詩と酒だ、とし、オーマー・カイヤム、魏武帝、陶淵明、李白の詩を引き、賀の詩からは「苦昼短」「相勸酒」「将進酒」「秦宮詩」を掲げ

酒精中に沈酔して、すでに「薄あるを知らず、魏晉を論ずるに還あらんや」、ただ「人間酒暖かにして春茫茫、花枝簾に入つて白日長し」とおぼえるだけ、そこにもまた冷酷な社会と涙的世界があるのか、そこにも一月寒く日暖かに、未だて人の寿を煎るし恐怖があるのか、ままよ……青春日まささか喜びんとし、桃花乱落、紅雨の如きをや、「斃屍に醉臥す満堂の月」で「生の歎喜」を享受するのがまだ。

(八)夢について、抑圧された欲望が、絶対的自由を求めて表現しうる唯一の時間、夢だとの蔚川説を引き、その夢は夜の睡眠時のみでなく白昼の非非的想像と幻想をもし入れて考えてよいとする。そうして賀の「仙人」はその夢中の仙人を描いたもの。「神仙曲」はさらに詳細に天庭を写し、自ら仙人となつて天庭を遊覧するのが「夢天」、理想的天宮を写したのが「天上謠」、天上の繁華を写すのが「上雲兼」、みすから秦王(神人)となつて八極に遊ぶのが「秦王飲酒」、李商隱「李諷小伝」の白玉楼の話は、危篤の病人の意識の深層が浮起したもので、賀が平生神仙となつて楽園に住みたいと思つたものがそこに発現したものだ、とする。

(九)文学は人格の表現で、一人の文学者の作品はかれ個人的人格表現が透徹しているほどよい、われわれは李賀の詩歌を読んで、かれがどんなに志を得ず苦悶する青年であり、現任に対し

悲觀を抱き人性に対して頹廢的で、酒に利那的享樂を求め夢中に理想的樂園を求めたことを知る。かれの個人的人格はその作品中から生きいきとあらわれてくる。

世評では「李賀鬼才」という。おおむわかれの感情の異常、想像の奇怪、造句の特別のだ。たと之は「勸君終日酩酊醉、酒不到劉伶墳上土」「伏願陛下賜名絲不歇、子孫綿如石上苔」「月寒日暖來煎人壽」など。

陳氏のこの評伝が出てから五十年たった。悲觀・頹廢・享樂・幻想の詩人は、いまや法家主義の詩人。西方向の論文を読むと同一の詩人を対象とするものとは思えない。しかしそのいずれかがあやまっているわけでも、うそをついているわけでもない。つまりは李賀がこの西方向を含む複雑な詩人で、恣意的に一方にひきつけて割りきろうとしても割りきれないのだ、ということだろう。

陳氏についてはこの評伝のあること以外は知らない。

石川 一成

一九五五年、李賀詩の色彩を主題とする論文が二つ出た。石川一成「李長吉の色彩感覚―経」と「緑」に表象されるもの」と荒井達「李賀の詩―特にその色彩について―」だ。後者については別に記す。石川のは東京教育大学・中國文化研究會発行の「中國文化研究會報」第四期第二誌の一八一―二二ページを占める。その中から幾条かを抜き書きする。整理番号はわたしの便宜上あ

1 長吉の好んで描く神仙境は陳子昂・李白等が描く超俗的な世界とは異つて奇怪な妖氣と幻想を漂ふ世界が、どぎつい色彩によつて描写されてゐること。「光」「玉」「香」「いふ語への愛好が顯著であり、それが可中にあつて相呼応しながら冷徹と香氣との情趣ある世界を點綴させ、又「香」「玉」がその香と白玉とかの氣体を表現するよりも、修飾語としての使用が多い。

2 「怨」「恨」「愁」「老」「衰」「衰」の如く人間感情の動搖、不健康な面や生命の枯渴状態を表す語に対する愛憎、その等の語が前期の「香」「玉」と同様に修飾語としてより生命を持ち、非修飾語を規制し、それらの中には、修飾・非修飾の前後には容易に立ち得ない語と語を結合させ、長吉の創用語と認められる語へ同時代の韓愈・曹島・盧仝を調査した範囲内では認めることの出来ぬ語が彼の強い主観の表出に外ならぬことを考へた。

3 長吉の眼に映ずるの口色彩は白であり、その色彩をもたらず外の個々の対象には全く興味を惹かぬいかに見える。「紅」なり「緑」なりが松とか松とかいふ個々の植物であることは勿論、樹とか花であるかの敘述さへも抛棄してゐるのである。それよりも「緑」なり「紅」なりがどのような様相を呈してゐるかが問題なのである。長吉の自然への眼は自己の感覚に、主観に最も忠実であることが「幽紅」「閑綠」「老翠」等々といふ、詩語を構成するのである。

4 静+緑樹↓静緑樹↓静緑 冷+紅花↓冷紅花↓冷紅 これが長吉の詩語構成の過程ではないだろうか。「樹」といはずとも「花」といはずとも既に必ず一首の詩のなかでそれが具體的になんの色彩を指示するものであるかが明瞭に會取される以上、長吉の眼からは彼以前の詩